
キリサキサギリ

獅子等

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キリサキサギリ

【ZPDF】

Z0702M

【作者名】

獅子等

【あらすじ】

『熱素学』、『速素学』、『力素学』、氾濫する世界。

そんな世界でのお話。

epilogue and prologue

鮮血が月夜に軌跡を描き、そいつの肩が地面に落ちた。

彼はただ、逆袈裟斬りを放つただけだ。銀色に光る切っ先は腰の辺りから骨を陶器のように碎き、腹筋、大胸筋を切断し、そして、鎖骨を碎いた。たったそれだけであった。刃を振るつた理由としては、邪魔である以外彼には理由がない。

そいつの上半身切断部から赤い糸が見えているが、彼はそれを経験から、筋肉の筋だろうと見当を付け、自分の技術を鑑みる。

「…………」

突然、金属音にも似た生物の声が夜に包まれる広葉樹林を基礎とした森林に轟く。

恐らく、血の臭いで鳴いたのだろうと、彼はそいつの死体を感情も無く見つめ、戦闘の邪魔にならないよう横合いから蹴りを入れ、夜風にざわめく森に退かす。

彼の立っている道は、街へ続く唯一の道だ。この森はあまりに人間が寄り付かない事から、開拓や整備をされていないのだろう。所々に浅い穴が見られる。しかし、彼には好都合だった。もし、この道が活気ある道であり、もし、人が居たら、面倒が増えるだけだ。今や死体に変化したそいつの様に、また物をせがまるるのはうんざりであった。

「…………」

ワシャヤ、と草が踏みにじられる音が彼の耳に滑り込む。『あれ』が自分えもの

を狩猟しに来たのだ。

月光を反射し、銀色に光る両刃剣の機鋒を斜め下後方に向け、腰を

落とし、重心を下にやる。数多の血により赤く錆びた両刃剣の表面には何か象形文字のようなものが彫られていた。

彼の視線を数十m先にゆらりと動く赤い点に向ける。

「依頼だ」

彼は太い男の声でそう呟く。それに呼応するように『あれ』が飛び出す。

体長3m程ある生物。胴体は黄と黒の薄汚れた虎。顔は赤い四つ目の猿。尻から大蛇のような尻尾が生えていた。

『あれ』の銘を、鶴と呼ぶ。

鶴が地面を蹴る度、重低音が彼の横隔膜を揺らしている。しかし、気に入った様子も無く彼は直線に駆ける。両刃剣と地面の接触面から黄塵が宙に舞っていた。

地面が揺れ、鶴が跳ぶ。獲物との間合いを必殺の間合いにする為。

ガガツ、と音を上げ、彼は巨大な両刃剣を振り上げ。

刃の先は彼を押し潰さんとする鶴の左前脚を切断。そして、彼は凄まじい慣性力を右手で打ち消し、横一直線に振るが、

鶴は残された三本で3m程飛び退く。鶴の左前脚だった空間には四つ目と同色の血液が滝のように流れ出ていた。

彼は痛みに狂う鶴を見据える。先ほどの一発で仕留めるつもりであつたのだ。これでは鶴がどんなに狂つっていても迂闊に襲つてこない。彼の、全体の認識では鶴とは一撃で仕留めるべき相手なのだ。成獣に成ると人間に匹敵する頭脳を持つが……

「…………子供か」

彼は楽な仕事であった、と口の端を歪める。頭脳がない鶴など、ライオンを狩るのと何一つ変わらない。

「これで、鶴を討伐した称号が貰えるなんてな。はつ、一石二鳥だな」

凶悪な笑みを浮かべた男が腰を落とし、刀身を肩に掲げる。鎧が肩の切断を防いだ。

ギロリ、と鶴の幼獣が彼を警戒するように睨む。切断された左前脚は土に塗れ木材にも見え、先ほど分かれた左前脚の断面はすでに短い黄色の毛で覆われていた。

「…………

ワサワサと、風が森を洗う。

彼は巨木の枝のような柄を強く握りなおし、

速素学生物変化『舜尺』を発動。

巨大な両刃剣を肩に携える男が打ち出された弾丸のように鶴との間合いを詰め、厚さ5cmの両刃剣を下から上へ振り上げる。突然の事に戸惑っている鶴の胸骨を砕き、勢いのまま表皮を切り裂く。

しかし、機鋒は鶴の背から顔を出したところで止まる。

鶴は状況を判断できず、アドレナリンの異常分泌により痛みを通り越し、鉄骨を振り回すような一撃が、

「爆ぜろ」

彼が口元を歪めて言った瞬間、

両刃剣刀身に刻印されている熱素学炎系『火燐』を発動し、鶴の背面がボコッと膨らみ、肉片、血液を振りまきながら爆風を生み出す。鶴は爆発の威力にうつ伏せに倒れるが、彼は力素学生物変化『鬼力』を発動し、支える。

そして、苦にした様子も無く横に吹き飛ばす。

ドコンツ！と凄まじい音を上げた鶴はビクビクと身体が振動。

これは鶴特有の現象だ。生まれた直後から力素学生物変化『鬼力』がDNAに刻印されていたのがまだ持続しているのだ。人での死後硬直に近い。だが、数十秒後、ピタリと止まる。それはまだ、幼獣であつたからである。幼獣の場合、『鬼力』を完全に使い切れていなかった結果であつた。

彼は鶴の胸から背にかけて突き刺さる両刃剣をズリッと引き抜き、そして、仕留めた獲物の首を刎ねる。空中に血を振りまきながら

鶴の頭が舞つた。

「ふう」

彼は両刃剣を担ぎ、血に塗れた鶴の頭を

掴めなかつた。

圧縮された空気の大玉が彼の鎧を砕き、ザザザザザザザと吹き飛ばす。 続けざまに空に巨大な影。

「ツー！」

横転していた彼は身体に残留していた『鬼力』を使い、腕の力で無理やり横に飛ぶ。 両刃剣の切っ先は地面を這う。

バコンッ、と地面が、道が蜘蛛の巣状に破壊され、道から捲り上がった赤土色のサッカーボール程の岩が両刃剣を握る男の鳩尾に突っ込んだ。

彼は吹き飛びそうになる身体を右足で支え、何とか立つ。 砂利を含む粉塵の中に成獣の、

「鶴か」

彼は脇腹の具合を調べながら、唇をかみ締めるように呟いた。 手の感触から骨の損傷はないようだ。 グイッと『鬼力』の反動により軋む身体を奮い立たせる。 そして、三回目の『鬼力』を発動。 それに応じるように黄塵の中の影が咆哮。 砕けた鎧が振動する。 彼は両刃剣の強く握り、二度目の『舜尺』を発動。

月を背にして土煙を切り裂き、『舜尺』により爆発的な速度、『鬼力』により爆発的な腕力の必殺の一撃で彼は、『鶴』に挑む。 土煙の中、黒い影が彼に向かつて一直線に発射され、彼は巨大な得物を上から下へ振る。

ズシャツ！と肉を切り裂いた心地よい感触と切断音を彼は感じ、

吹き飛ぶ。

耳に己の骨が無茶苦茶に砕けた音が反響し、ノーバウンドで十数m滑空し、赤土色の道路にゴミを捨てた様に転がった。

「はあ、はあ」

彼は擱げた足を氣にしている間も無く、この空間の支配者を、顔を上げて見る。

土煙は消え去り、ぼやけた視界に真つ二つの鶴の死体が横たわっていた。勝ったのだと彼は自覚し、直ぐにそれが儂い虚だと認識する。死体には首が無いのだ。その証拠が啓示する未来は、自己の死のみだつた。

その死体より一周り大きい体躯を翻し、成獣の鶴は彼は一瞬、光つたのを見た。それは熱素学類の発動の光だ。しかも、自分も好んで使つていた炎系統と、あまり使わない風系統の合成系なのだ。

彼は合成技を好かない。合成技はタメが長く、時間を要する。この時間は神があ与えになつた懲悔の時間なのか、それとも、死を目前にして、ただただ恐怖に怯える時間なのか。

彼は左半身が麻痺を起こしているが、『鬼力』により、力ずくに頬を上げる。

笑いたくなつた。殺されるのは決まつていたからだ、当然の報いだと、彼は自分を蔑める。そして、笑う。

死ぬ前は笑つてやるのが一番だと考えたからである。誰に笑つてやるかなんて決まつているのだ。それは、

摂氏2000度の死の烈風が道を疾走した。

漠然な出会い

三階建てのボロい寮の寂れた壁に面する階段から、

「え？」

と空にキナイの声が響き渡った。

話がさかのぼり3分前。

「始業式に遅刻つてさ、やっぱ過ぎだらー！」

キナイはガラステーブルに乗っている昨日の27時まで、気力をすり減らしながら夏の宿題（終わってない）を取り、黒色の学生鞄に雑に突っ込む。奥の方でクシャ、と心地よい音が発生したがそんなの気にしていられない。

キナイは壁に掛かる貰い物の円時計に目を向ける。

横に一直線だ。

逆算しても、そもそも、始業式が始まっている。そして、このクソ暑い中、学生達が立っている頃だ。

結果オーライと言いたいところだが、彼の場合そういうかない。

学力不振のキナイは、自分が叱られる映像が、網膜を通さずとも、脳内再生のフィルムがフル回転だった。

「これは、ヤバイ！！ すっげえーヤバイ！！」

黒髪の寝癖が明後日の方向に向いているキナイは学生服を着ようと、クローゼットを開けたが、

「うつそおおおおー！ くつそー！ クリーニング屋から取つてくるの忘れたああああー！」

仕方なく、キナイは冬服の無駄に厚い学生服を着る。 中から

赤いTシャツが見えていた。

「ああ、それと、と言つてキナイはこれまた分厚い学生書を鞄に突っ込み、立て付けの悪いドアを開ける。

きい、と無駄な効果音を付けて、開かれた扉の先には晴れ晴れとした青空。

こんな日に長袖を着ている自分に憂いを覚え、はあーとキナイはため息をついた。

（こんなに青いなら海に行くべきだよなあ～って、こんな事考えている場合じゃない）

キナイは太陽が燐々と降り注ぐ直線的な通路を走り、壁にぴつたりと張り付いた階段の一段目に差し掛かつたところで気付いた。

「なんだこれ」

白い。

第一印象は白だつた。

白いシーツに覆い隠されていて、何がなんだか分からない。心なしか人の形をした起伏があるような気がする。恐らく、酒で飲み明かしたおやじだろうとキナイは見当を付けた。

面倒事が立ちふさがった氣がするが、ここを通らないで下りる事は彼には不可能なので、仕方なく一段、一段、忍び足で下りていく。

一步、近付くごとににはつきりと人の形だと分かる。

キナイはそおーと、赤く錆びた手すりを掴み、その物体を越えようと足を伸ばす。

が、

ガバッ！！ と、キナイの足首が死人のような白い手に勢い良く掴まれた。

「え？」

キナイは錆びて軋んだロボットのような動きで、その腕を見る。

白い。おやじじゃないと彼の頭を駆け巡り、

「なにこれ？　いや！！　なんだよ

「　　水

「は？」

「みず」

と、可愛い女の子の声がした方向は白いシーツ物体だ。キナイは恐る恐る、その白いシーツをシンシンと足の先でつついてみると、

感触から、人間だ。

「みず、くだしゃい」

また、あの声だ。

(なんだ、酒癖悪いだけか女人の人か)

キナイは疲れたように今日一回目のため息を付いて、

「水つて、居酒屋行ってください」

と、ガバッと白いシーツをめくった。

「みずううう……」

そこには白髪、赤眼のしおれた可愛らしい少女がキナイを見つめていた。

部屋は太陽が燐々と差し込まれ、夕飯のとりがらスープの匂いが立ち込めていた。

コップに注がれた水道水をグビグビと美味しそうに飲み干す少女をベッドに座りながらキナイは見ていた。

目は血のように、ルビーのように赤く、腰まで届く髪と肌は先まで白い。見た目はスレンダーというより、幼い体つきだ。顔も同様で、二重が印象的な大きな瞳に、控えめの鼻。赤みがかつた頬。そして、装飾も何もない黒いワンピース。まだ、年端も

いかない少女だつた。

そして、その少女があまりにも美味しそうに飲む水道水は、実は純粹な雪解け水ではないかと、彼は頭の端で考えていた。

そんなどうでもいい事を考へてゐるキナイは、あつ、と思ひ立つたように口を開く。

「あのさ、名前は？」

その少女は五回水が注がれたコップを、ガラステーブルに、ガチンツ、と置き、

「普通は自分から名乗るべきだと思つよ。じゃなくて、思いますよ」

「え？」

ああ、そうだよな、とキナイは言葉を繋げ、

「俺の名前は、キナイ・フローレンツです。学生してます」

「じゃ、私の番だね、と元氣を取り戻した少女は言つ。

「ステラ・アルカイ。人間です」

ステラ・アルカイと名乗つた少女はなんだか嬉しそうな顔をして言つた。

一方のキナイは難しい顔をして、

「あの～人間つて、あれですよね。皆に適用すると思ひます

けど

「ん？ もう少し、自己紹介して欲しいの？ 別に良いけど、驚かないでね」

キナイは頭を縦に振る。

「私は、この国から858km北東に存在する『ロンティニウム』出身で、」

「は！？ ロンティニウムって、そんな、万が一つもない嘘を」

キナイは呆れたように呟いた。

すると、ロンティニウムから来たと言つ少女は、ふくうーと頬

を膨らませて、

「ロンティニウムから来たもん！！ 嘘じゃないもん！！」

「じゃあ、もし来たとしたって、こことの関係知ってるだろ？」

「うん。 知ってるよ。 この国リアゲルは素学が発展した国だつて。 人口は約540万人。 王権主義国家。 そして、国連所属の先進国。 それで、ロンティニウムは宗教国。 国民全員がキリスト教徒で、人口は約3882万6000人。 コンクラーヴェで決まった教皇様が統治する国。 簡単に言つと、国連と仲が悪いんだよ！！」

少女は自慢話をするように話したのだが、キナイはどうも納得できなかつた。

彼女も言つように、このリアゲルとロンティニウムは国交断絶の一歩手前まで来ているのだ。

リアゲルの中核は巨大な壠に囲まれた近代的な都市だ。 そこでは、素学を専門にした学区が多い。 彼も素学学区の一員だ。 そのお陰か、国連の中でも飛びぬけて未来に向かつてゐる。 片や、ロンティニウムは、古の国。 歴史を重んじ、神を奉る宗教国。 素学は神の理を反するらしく、彼らは、使用方法は多少、変わらが、素学を魔術と名付けて行使してゐた。

問題は素学と魔術のそこにある。

神を科学的に研究するのが、リアゲルとしたら、疑問を持たず、に神を信じ続けるのがロンティニウムだ。

その相反する思想がぶつかり、絡み合い、少しの振動で切れるほど国交が切れ掛かつてゐるのだ。

「だから、リアゲルに入れないだろ？ リアゲルに入るには身分証明書、提出しきや。 つつか、この地区に入つて來た時点で、色々とおかしいよな。 お前、ここの中区にどうやって入つた？ もしかして、あの壁、飛び越えたのか？」

「ん？ うーん。 逃げてきたよ」「は？」

キナイは自分でもアホらしい声を出していた。白銀の長髪の

少女は、また話せて嬉しいのか、ワクワクした面持ちで言葉を紡ぐ。
「なんかね、すつごい筋肉の人たちが、剣みたいの向けて、証明書見せろって言つから、無いつて言つたら、帰れって言つたんだよ。だから、帰ったフリして、強行突破したの。そしたら、その筋肉達が凄い顔して追うから、逃げたつて訳」

「じゃあ、それが本当なら、俺、犯罪者、かくまつてるじやん。いや、そもそも、逃げ切れる訳ねえよ。警備兵から逃げ切るつて……ありえない。攻撃みたいな食らわなかつたのか？」

「あつ、聞きたい？」

少女は目を輝かせる。

「ま、まあ」

「うん。攻撃は食らつたよ。痛かつたけど、でもね」「でもね？」

少女は彼女の脇にある何かを右手で掴み、バツと両手を使い、広げる。

「これが守ってくれたの……！」

彼女の手には白いローブがあつた。キナイがシーツと認識していたものだ。

「それが、どうした？ 魔術の粹だつて言つのか？」

「うん！」

淀み無く少女は頷いた。

「…………住所どこ？ お兄ちゃんが送つてあげよつ。もう、

始業式は終わつてるし、もう行くの面倒だし」

「え？ 住所はロンティニウムのキササギ大聖堂の

「…………違うつて、そんな嘘じやなくて、学生寮の住所だよ！」「

「嘘じやないもん！！ ホントだもん」

ムツとした顔をした少女に、キナイは、

「…………証拠は？」

と、この少女の意味不明な言動と夏休みの宿題の疲れのダブルパンチである多大な疲労を隠そつともせず、呟いた。

「証拠？ 証拠ならあるよ。これ、開けてみて」

ムツとしたままの少女は、白いローブともう一つの手持ち、少女の身長ほどの長細く硬いカーボン製であろう円柱をグイッとキナイの前にズイツと出す。その円柱は、塗装も、装飾も何も無い。今このこの地区では逆に珍しいよりの物だ。

キナイは正直に受け取り、

「どうやって開けるの、これ？」

と尋ねた通り、裂け目一つ無いのだ。また、無駄に重く、中は空洞には思えなかつた。

「横にして」

「こう、か？」

円柱はキナイに掴まれたまま、床と水平になる。

それを見て、少女は、うんと頷き、今までと違つ真剣な表情で赤い目を見開く。

「万物を構成する第一の素よ。 我が声を喰らひて、糧にせよ
その声に呼応して、赤い閃光が黒い円柱の側面にゅっくりと走り、
裂け目が出来る。

少女は亀裂が入つたのを見て、よし、と呟き、

「開けてみて」

と、気楽な笑顔を浮かべてキナイに言った。

一方のキナイ。驚きを隠そつとはせずに、その円柱と少女を交互に見ていた。

声だけで反応する素学を、彼が知る限り、存在していない。
かの偉大な素学士、イアンペルド・カルシエンスは、こう言葉を残した。

『素学とは、体そのもの』

その言葉の通り、体の一部に素学式が体に触れていないと発動する事は皆無。

（マジで、魔術？ 違うぞ。 魔術なんて無いんだ。 それはロンドゥイーウムが言つてる事で、ただの脅し文句だよな。 そようだよ。 素学＝魔術だよ。 これは音声認識のなんかだ）

うんうん、とキナイは自己完結した後、

「開けるぞ」

と、キナイはパカッと円柱を竹を縦に割つたように真つ二つに割る。

中に納まつていたのは、円柱ほどの白い棒。

杖にも見えるが、それにしては無骨すぎる。 しかし、どこか厳格で神聖な雰囲気が漂つっていた。 触れたものの穢れを払拭するかのような白が部屋の窓を通り抜けた太陽光を反射する。

キナイはその白い棒を嘗め回すかのように見ると、何も宗教的なものは見当たらない。

ふと、筒の裏側に目を向けると、

「…………警備兵の詰め所にお兄さんとい一緒に行こうか」
割れた円柱を元に戻し、なるべく満開の笑みでキナイは優しく言った。

「嫌だ。 お腹減った。 ラーメン食べたい」

ふんっ、と少女は腕を組み、明後日の方向に顔を向けた。

「でもさ、詰め所でラーメン食べれるよ。 しかも、俺ん家には無いし」

「私が買つて来る。 お金頂戴」

「いや、詰め所行つた方が早いと思ひますけど……」

「だ・か・ら！ ここで食べるの！！！」

突然、バンッ！ とガラステーブルは手加減なしで叩かれ、少女の叫び声が寮内に冴え渡る。 少女の顔に焦りと恐怖が滲んでいた。

突然、豹変した少女に圧倒されたキナイは、少女の白く細い腕を掴み、引く。

「叩くなつて、ほら、行こつぜ。 詰め所。 つつか、なんで、

そんなに行くのそんな嫌なんだ？ その黒い筒は拾つたつて事にしろよ。 な？ そうすれば、そんな危険な物、持つてなくてすむし」

「絶対、駄目」

「いや、だからや」

「駄目なの！！ そんなの絶対信じてもらえない。 私は何で逃げてるの？ そんなのすぐにばれちゃうよーー！」

「お前が悪いんだろ？ 強引に入るから。 そうだな、俺も一緒に謝るからさ」

少女は必死に頭を振りそれを否定する。 顔は叫んだせいで赤く染まり、大きな目の下には大きな隈があった。 それでキナイは気付く。 今日の話では無い事に。

だから、こんなにも焦っていたのだ。 一日中、追い回された敵の本拠地に抵抗もせず、出て行くなど、考えたくも無かったのだ。だからこそ、

「そういう問題じゃないーー！」

「そういう問題だつて、誤解を解けば何とか成るんだよ、嘘でもれ。 本当は違うんだろ？ ロンティニウムから来たなんてさ」

キナイは問う。

お前はロンティニウムの住人かと。 答えは分かりきっていたが。

「ロンティニウムから来たのーー！ じゃ無かつたら、追われてないよーー！」

「ん？」

少女が、どこか引っかかる言い方をする。

「ロンティニウムじゃなきや？ じゃ、ロンティニウムじゃなかつたら、追われてないのか？」

「うん。 こんな目に遭つてないよーー！」

「じゃあ、お前、追われてるのって」

「ロンティニウムからだよ……」

少女は伏目がちに答えた。

光り輝くものを直視できないよう

に。

漠然な出会い（後書き）

なんかね、短くなってしまった……
もう少し、掛け合いやりたかったけど、まあ、こんなもんか。

嵐の前にある日常

巨大な素学学区は、巨大とは言ってみても、リアゲル一国に比べれば、点のようなものだ。

しかも、学区には国家による開発が進んでおり、商店などが少ない。勿論、彼の寮も学区外だ。

よつて、キナイとステラは、学区外に通る石畳の歴史を感じさせる道（実際、歴史はあるが）を、傍から見れば兄弟のように歩いていた。

「ラーメン、らあーめん~」

ステラは黒いワンピースをなびかせ、大手を振りて歩く。カツカツ、なるのは、彼女が履いている、皮のサンダルせいだろう。

「お前、追われてんじゃねえーの？」

その隣に、周りを伺つよつて歩くキナイ。

ちょうど、その角を曲がると、彼らは、正午であつたら主婦が行き来する筈の大きな商店街に差し掛かる。軽い上り坂になつており、脇に目をやると、ショーウィンドウのマネキンが勇ましく立つていたり、果物が並んでいたりと、色とりどりの店が連なつていた。もちろん、ここに来た理由は目的はステラが懇願するラーメンの為だ。

「大丈夫だよ。警備兵が来たら、キナイが何とかしてくれのでしょ？」

少し先に歩くステラは、クルリと回つてキナイの方を嬉しそうに向いて、言った。

一方のキナイは、疲れた顔をして、

「いや、アルカイさん。やめてください。そんな無謀な期待

待

と、肩を竦める。

「え～なんでえ～」

「なんでつて理由は無いけど。とにかく、俺は今、講義をぼつてんだよ。これは非常にヤバイ事態だぞ。今日はクラス替えたの」

また、ステラは正面に向き直り、

「ふうん」

「反応薄ッ！！」

「ラーメンは豚骨が一番！！」

と、脈絡もない事を元気よく右腕を天に伸ばした。

「お前、マイペースすぎるだろ」

キナイははあ～と今日、何回目かのため息を吐いた。

本当に疲れていたようで、欠伸が止まらない。まあ、結局、この努力が水の泡になるのだが、それを気付くのは少し後の話である。

「気にしないで、いこおおおお……」

その様子を氣にも留めず、歩くスピードを上げるステラ。

それは、逃亡者のテンショーンではない事は一目瞭然だろ。づ。

まるで、児童が遠足に来たような騒ぎっぷりだ。

その様子を見て、ふいにキナイはある事を思い出す。

「ああ、そう言えばさ。あの箇、家にあるけど良いのか？」

あんな物を家に置いておきたくないキナイが聞いたのは当然の事であろう。実際、ロンディニウムという、仮想敵国の武器とも取れない何かが置いてあつたら、それはもう反逆者として確定的である。言い逃れ一つ出来ない。

「うん。気にしないで、まだ一日は大丈夫だから」

「一日？」

「うん、一日」

と、言つて、ステラは早歩きをキナイのぐーたらな歩行速度にあわせる。

あまりに白い髪がキナイの右手をくすぐり、彼は少しステラと間を空ける。甘い匂いが漂ってきた、といつのも一つの理由。といふか、こちらが大部分の理由である。

「いや、一日がどうしたって？」

「一日で此処に来るんだよ。多分だけど」

「ロンティニウムの連中がか？」

「うん」

「なんで、分かるんだよ？」

「今までの経験からだよ」

ニタツ、とステラは笑う。

「なんか、気楽だな」

と、キナイは思つた事をそのまま言つた。

やっぱり、追われているのなら、こんな事をしている場合ではない。武器とか逃走経路とか色々と調べる事が面白押しではないか、とキナイは考えた。

とは言つても、結局、その逃亡者の張本人が問題ない、というのだから、問題はないのだろ？

「そつ？」

ステラは普通に首を傾げる。本当に疑問に思つていないようだ。

「そうだよ。追われてる身なのに、緊張感ねえーっつか、何と言つか。もう少し、身構えようぜ。いつ襲われてもいいように」

「私を襲う気なの！？」

ステラは芝居っぽく、叫ぶと、それなりにノリがいいキナイは、「俺は、断じてロリコンじゃない！！ いや、どんなに可愛くても手を出してはいけないと俺の魂が叫んでる！！」

と、人が少ないとは言つても店員が働いている商店街で叫んだ。奇異を見るような視線が痛い事に彼は気付いて無い。

劇場では羨ましがる程の視線の集めっぷりだ。

「…………あのや。 ラーメンつてどうで買つの？」

「あ？ ああ、そこだよ」

実は、ロリコンを全否定というわけではなく、と先ほどまで熱く自分の癖を語っていたキナイは、顎で微かに見える看板を顎で差す。 その看板は『何でも屋』と捻りも何も無い、日用品が安値で売られている店のものだ。

時々、いかがわしい物があるが、それ以外はいたって普通の店だ。 いかがわしいものがある時点で普通かは、気にしてはいけない。

「あそこで買うの？」

「インスタントだけどな」

「インスタント？」

「インスタント知らないのかあ…… これだから、今の子供は。ほつんと、お高く止まっちゃってよ」

「あ~~~~今、バカにしたでしょ…… 私だって、キナイの知らない事だって知ってるんだから……」

ふくう、とハムスターのようになにか言ひながら、駆け出るやう、真っ白い頬つぺたをステラは膨らませる。

「何だよ。 言つてみろよ」

キナイは面倒そうに呟いた。

その事がさらにステラのエンジン回転数を上げ、

「分かった。 言うから……」

「ほう。 我が聞いて進ぜよ」

「鶴は人工物だつて事……」

「ん？」

と、あまりにも外れの事を言われたときに出来る、声がキナイの口から漏れた。

余りにもぶつ飛んでいた話だからである。

「だ・か・ら・！ 鶴はロンティニウム製の生物兵器なの！！

本当の名前をフェンリル＝サードって言うんだよ」

ステラは腕を上下にブンブン、振つて必死に言つが、

「また、出まかせを。 そんな事言つたつて、お兄ちゃんは信じません！！」

と、お兄ちゃんに軽くあしられる。

だが、彼女のエンジンは回転数を上げり続ける。

「バカ！！ 本当なんだから！！！」

「証拠は？」

「証拠は……今は、無いけど……嘘じやないもん！！！」

「そんな訳無いだろ！！ そしたら、アレだ。 あ～何でもない」

い

それを聞くと、ステラは、してやつたりと、ニヤリと笑い、

「あつ、その感じじや、私の言つた事信じたみたいだね」

「違う違う。 ロンティニウムの神に誓つたていいぞ」

「このキササギ大聖堂のシスター兼居候の私に誓いを立てられるの？」

やつぱり薄い胸を自慢げに張るステラを、キナイは足の先から頭頂部まで眺め、

「…………」「冗談を。 シスターならもう少し、それなりの格好をしないと。 そんな真つ黒のワンピースじや、説得力ナッシング」

グ

と、呆れたように言った。

彼の想像の中での話だが、シスターというのは、特に胸が大きいイメージがあるのだ。だから、このまな板女が、シスターと言つて、一種の男子学生がムラムラするランキングTOP10に入る代物だとは、到底思えない。

いや、逆にそのツルツルが誘つて……と性癖の海にダイブしそうになつた所に、

「ナッシングじゃないよ。NOTHINGだよ」

と、本当にどうでもいい事がステラの舌足らずの声で海に投下された。もう少しで、妄想の海へと、未練たらたらのキナイは、恨めしそうに呟く。

「そんな、発音どうでもいいですよ。はあ～めんど」

「さつき、面倒って言ったね。もういいよ！！」

フンッ！…と首を振り、拗ねるステラ。

これ以上、面倒を増やしたくないキナイは

「その～今日は、ラーメン高いの買っちゃおうかなあ～」
と、あからさまに機嫌とりにいった。

「ホント！？」

見事に彼の術中にはまつた少女一人。

それを見て、キナイ。ホント、現金な奴と思いながら、「ホント。チャーシューも買っちゃうわ」と、調子よく言った。

「じゃ、出発うううう～！」

「おまつ、行くな！！」

キナイは先に走つていったステラの後を追う。

「金ねえ～よ。チヨット、奮發しそぎた。くつそ、研究費を私用すつか？」

キナイはダラ～、と足裏をガラステーブル近くに放り出し、午後7時の夏に横になつていた。

横になつているのは勿論、彼の部屋だが、朝の清々しい空氣に濃い豚骨の匂いが漂つている。

日の辺りがいいこの部屋に淡い夕焼けが溶けていた。

天井を見ると、蛍光灯が青白い光を放つていて。

無論、電気を灯さないのはエコとかではなく、電気代を浮かす為でもなく、ただ、面倒なだけだ。

「時は金なりつて言つじやん。だから、金がある時間は楽しいんだよ」

素学の教科書を読み飽きたステラは、キナイ専用のベッドの上で、彼と同じようにダラ～と横になっていた。なんだか、形容しがたい男の臭いは疎ましいが、このサスペンションが効いたフカフカのベッドの魔力には彼女は勝てなかった。

彼女は、ふいに、ベッドに転がっていたカピカピに固まつたテッシュと、ピンク色の本を、顔を赤くして急いで捨てたキナイを思い出し

あれは結局、何？

「なんか意味が違う。大体、その意味だつたら、金の無いこの時に言う必要あつたのか！？」

ガバッ！！とキナイは上体を起こし、一日で一年分のツツコミをしたように思いながらもツツコミを入れた。

「三割方ないよ。それにしても、暑いね

ステラは枕に顔を埋めて言った。

キナイの男性独特の匂いが酷い。おそらく、シャンプーの匂いだろう。

「七割意味あるのかよ」

「それにしても、暑いね」

ああ、とキナイは気付いたように立ち上がり、

「先に風呂に入るか。汗が気持ち悪いしな。なあ、アルカイ、お前、先入るか？」

と、尋ねた。

「それにしても、暑いね」

「そうか。じゃあ、俺が一番風呂頂くとするか」

「それでも、つて少しば相手してよおおお

ステラは枕から赤い顔を上げ、キナイの制服のズボンがガツチリと掴む。

「俺だって暑いのは分かつてんだよ。なんだ、嫌味か？ どうせ、このボロい寮には空調設備なんて高価なものないですよ」

「じゃあ、お腹減つたあああああ！」

掴んだ腕をブンブンと拳を握つたまま縦に振る。

「分かつたから、先に風呂入らせて」

「嫌だ。飯が先」

さらに振りは強くなる。

「お前、制服、そながつちり掴むなよ！ 破れるつてさー！」

「

それを素直に聞き、ステラは手を放すが、「めしめしめしめし」

飯コールは止まらない。

結局、麺を三回、茹でた筈なのだが、何故、こんなにも腹が減つているのが、キナイには疑問すぎる。見た目から言つて、大食では無いのだが。

「分かつたから、飯先に作るから。話してください、レディー

」

「何か、バカにしてない？」

「どこを？ ただレディーって言つただけだぞ」

「じゃあ、何で私がレディーに反応したつて分かつたの？」

「いや、それはいいがかりで、貴女様の体躯とナイスバディーのレディーを同時に連想しなさったからでは？」

キナイは当たり障り無いように丁寧に尋ねたつもりだったが、

「ふん。もういいよ。会つて間もないのに良くそなに人の事とバカにできるよね」と、さらに怒らせて仕舞つたらしい。

キナイは、なんだかアホらしくなつて素直に言葉を紡ぐ。

「勝手に飢え死にかけて、勝手に水道使つて、勝手に昼飯を食つたお前には言われたくない！！ 働かないものは食うべからずつて言つじやないかあ！！」

「じゃあ、私が夜ご飯作るよ

「へ？」

キナイは数秒考え、

「え？」

「何で、そんな驚いてるの？ もしかして、私は何も出来ないと思ってたの？」

キナイはブンブンと、頭を振る。

「ふーん、じゃ私の腕前見といてね。凄いんだから。バタ一まんべなく、パンに塗つたり、ケチャップで絵描くの、凄い上手いんだから」

ステラは、人差し指で何回もキナイを指差しながら言つが、キナイは、何故こんなにも自慢げなんだと、さらに驚く。

「それを人間は料理と呼びません」

「え！？」

本当に衝撃を受けたらしい。ステラは横になつていた体を、ガバッと起こした。黒いワンピースの胸元が、ヒラリと少し空間を空くが、谷間、ましてや山のすたのさへ無かつた。興奮する隙も無い。

「え！？ つてこつちが驚きだよ」

「だつて、シスター・シスカは料理だつて……」

「シスカさん。貴女は罪深い事を成りました。少女の純真な心を弄び、バターを塗ることが料理だと、意味が分からぬ事をつらつらとの述べた少女を、生み出してしまいました。これは地獄に落とされても文句は言えません。なので、シスカさん。今すぐにもこの少女を略奪に来てください」

「私の事はバカにして……バカにしちゃ駄目だけど……シスター・シスカをバカにしないで！！ 何故なら、シスター・シスカは凄いから！！」

なんか、必死なステラ。

「何が」

「頭も良くて、料理も上手くて、あと……牛みたいなんだから。その、あれよ、あれ。　おおおお、おっぱ…………って言わせんな！」

ステラの右ストレートが、キナイの横隔膜にクリーンヒット。じふつ、大量の空気が漏れ、キナイは片膝を付いてしまう。

「理不尽な、俺は何も……」

「もういい。　私が料理する！！」

ステラはベッドから、ボロソチい台所へ向かう。

この部屋主のキナイは腹の痛みに蹲っている。　あと、涙目。

「いつたああ。　つて、おまつ、ちょっと待て」

あれ？　これどうすんの？　と少女の声がガチャガチャという聞きたくない音とともに聞こえてくる。壊される！！

キナイは確信に近い何かを持つて、

「やめて下さい」

と、ステラの脇に立つて、細い腕をガシッと掴む。すると、ステラは、ムスッとした顔をして、言づ。

「ねえ、これどうやって火を点けるの？」

「あ～素学使うんだよ」

「魔術じゃないんだね」

「ここ素学専門学区だぞ。　火をつけるのは大体、素学類熱素

学

「じゃあ、点けて」

キナイは一度、部屋内を見渡す。

やっぱり、散らかり放題の部屋だ。　この女の子の暇つぶしの為、ビリビリに引き裂かれた特売セールのチラシが無残だ。

だからこそ、彼は誓う。

もう、被害を出さない事を。

とは言ってみても、キナイは何も出来ないので、ステラの質問にただただ返答する。

「俺が？」

「私、素学分からない」

「さつき、読んでたじやん」

「でも、魔術と素学を一緒に使つて、なんかありそう
「なんかつて何だ。 って言つても、まあ、いいか。 じゃ、

アルカイ、そこのマッチ使って、種火点けて」

「嫌だよ。 あつもしかして、使えないとかあ～？」

キナイの顔が驚きに変わり、

「え？ なんで、分かったの？」

「はい。今、第二部隊と交戦中です。情勢は」ひらが押し
ています。あと、40分程で終わると思われます」

「40分か。……では、俺が出よつ」

「私達だけで

「何だつて？」

後ろに付き添う男は、巨大な腕に押されたようにたじろぐ。

「いや、何も……」

「それでいい。お前は部下だ。ただ、俺に従え。そういう
えば、お前はなんだ？」

「私ですか？ 私は第一部隊」

チッと舌打ちの後、イスに座る男は続ける

「そういうことじやねえ。例えば、俺はスローネだ」

「私はエクスシアですが……それが、どうしたのですか」

「だから、中位が上位に作戦を提案するなよ。次、やつたら
首飛ばすぞ。分かつてるよな？ この世界は地位だ。力じゃね
え。どんだけ、強くたって地位がクソだつたら、認められねえ。
だが、そいつの力がクソだつたとしても、地位がな勝手に守るん
だよ。オートガードシステムとでも、言つのか？ ふざけやがつ
て、俺よりクソのくせによ、なぜ、俺をこんな末端の仕事をさせる。
まあ、エクスシアのお前には一生関係ない話だけだ」

男は吐き捨てる。

そこには、諦めにも似た感情が含まれているように、もうひとりの男には思えた。

「…………では、作戦をどうしますか？ キルズ・ムーデリア・
スローネ様？」

「だから、俺が出ると言つているだろ？ お前の耳あるのか？」

「では、他の者にはなんと、伝達をすればよいのでしょうか？」

「邪魔になるなどでも、言つておけ。ああ、俺は力あるもの
は、認めるタイプだ。公表はしないがな」

男はイスから立つ。

そして、沈黙が数秒、この場を支配した。

それに耐えかねたように立ち尽くす男は口を開く。

「…………この、後も任務が残っています」

「ああ、分かっている。ただの後始末だろ?」

ふん、と鼻で男は笑い、凶刃を地面から抜く。

その刀身は月光を浴び、鋭い光を反射していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0702m/>

キリサキサギリ

2010年12月17日17時46分発行